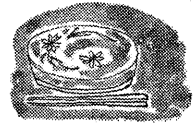


# 私の保育



菱川敦子

はじめに

ぼくの自家用車は藤の乳母車

あの長い坂道を

がったん ごっとな のぼっていく

運転手はおばあさん

暑いので すげ笠をかぶっているが

頭や顔は汗だらけ

「ぼくが大きくなったら ほんとうの自動車を運転して乗せて

あげる

遠い 遠い所までつれていってあげる

ぼくの大好きな おばあさん」

そのときまで 丈夫でいてください

私の実践記録のページに記された、この言葉のモデルであるふたりのおばあさんは、今日もみかん園の坂道をのぼって、帰ってきます。車にのせてもらっている幸久は、おばあさんが途中で行商の人から買った煮干の袋をひらいて、一匹口に入れてほうばりながら、満足しているようです。

「おばあさん、幸久君は朝御飯たべてきますの」とたずねると、「それが、兄ちゃん（小学四年）と七時に出るもんでたべません。牛乳だけでも飲むとよろしいけど」などと、いろんなお話をして、私も乳母車をいっしょに押しながら、途中まで送っていきま

す。  
(14ページ 写真)

このようにして山村の素朴な人たちの暖い心にふれると、私は、今日の保育の失敗も忘れてしまうのです。

伊勢市駅前のバスセンターより三十分、市街地をすぎると、宮川の流れにさかのぼって、南勢町（志摩半島東端）へと道はつづ

いており、神宮の萱<sup>か</sup>がとれる萱山の裾に、私の勤務している沼木幼稚園があります。私のこの園での生活も二年目を迎えました。

## 二、地域の生活と幼児

この地区では、山林の手入れや、農業だけが生計の中心であった両親たちは、社会の変動の波にのり、中小企業の某電子会社に働きにいらつてゐるため、留守を守る祖父母は幼児の手をひいて、植田の草取りをしたり、いのししが出て植田の苗を荒さないかと、見回るのが大きな役割となっています。

また、入園当初は、朝も乳母車に幼児をのせて送ってきてくださるおばあさんたちは、幼児たちが帰るまで園庭の草引きや、溝の掃除などをして待ってくださいなのです。

その上、夏草が通園路の坂道に一メートル以上もおいしげると、車が来ても見えないからと、それを刈り取ってくださいったり、この坂道が舗装されなかったころには、徒歩で一時間近くもかかる道を一輪車をひいてきて、幼児や小学生が歩きやすいようにと、石ころをよけてくださるなど、山村で連帯感をもって生きている勤勉な人々の姿は私にとって尊いおくり物でした。

また、会社から帰ってきた母親たちは、夕食の後始末を手早くすませ、幼児たちが園で借りてきた絵本を読んであげたり、ある

いは、伊勢市駅前のデパートで夏休みは課題図書を買ったり、男児の中には相当高度なプラモデルを買ってもらって、家族といっしょに組立てるといふように、そんなことで親としての役割を果そうとしているのでしよう。

## 三、幼稚園と幼児の生活

このようななかでの、入園当初の保育参観は、祖父母がきてくださったのですが、幼児といっしょに遊ぶという保育のため、次の保育参観から全員の母親がきてくださって、楽しいリズムあそびをして、幼児のほほと自分のほほとをくつつけた、あの母親の笑顔は最高でした。

日ごろ、幼児たちを祖父母に託している母親たちに、その日だけでなく、幼稚園での我が子の元気な姿と、また、手を取りあつて遊ぶことで親子のふれあいを深めてほしいと計画した、私の願いはいくらか達せられたように思いました。

### (一) 恵まれた自然の中での幼児たち

恵まれた自然であるため、夏休み中、虫とりを十分経験してきた幼児たちは、登園すると「先生、ほく、かぶと虫の夢みたん。くぬぎの木に止まるとる赤かぶとをつかむと消えてくん。そした

ら、かあちゃんが、幸ちゃんって起こすんやもん、かあちゃん起こさんだら赤かぶととったのに、赤かぶとは黒かぶとより高いんやんな」そんなお話をしてくれる幼児たちにとって、私の用意してあげた厚紙での虫かごづくりは、興味はあってとり組んだのですが、前もって書いてある展開図の線を延長し、切り込みを入れて立体的にするだけのことでも、幼児たちにとってはたいへんらしく「先生、二学期になったらきびしいなあ」とつぶやきながら、のりで接着する箱のすみを一生懸命おさえていました。

この虫かごをもって、園庭つづきの畠にある栗の木にとまっている、のこぎりくわがたをみつけた男児たちにつづいて、美保知子、ちさとの三人の女児も、草原や、あたりの木々をさがして、くわがた虫十四余りと、赤かぶと一匹、すず虫、きちきちバツタ、こおろぎなどを入れ、おまけに、このさわぎできじが飛び立ったので、卵さがしが始まるなど、都会の幼児たちにはうらやましい一日が終るのです。

やがて、山の子らが最も、目を輝かせてさがし求めるのはあけびでしょう。高い木にまぎついているつるにぶらさがっているこの実は、短いバナナのような皮が熟すとほぜ割れ、中から、たくさんの黒い種をふくんだ寒天のような甘い実が姿をみせ、秋は盛りとなります。

## (二) 秋の一日

ある土曜日、園庭で棒切れをみつけた厚俊と幸久は、「野球しよう」とゴムまりを打っていましたが、「これは細いであたらん」と訴えるので、私は、日曜日に玩具屋で、ビニール製のバットを購入して出勤しました。登園してきた幸久は、さっそくバットをみつけ、「おい、みんなで野球しよう」と他の男児たちをさそって野球あそびが始まりました。

ちょうど、その前日の日曜日は、中日とロッテの日本シリーズ戦で、どの幼児の頭にも共通のイメージがあったので、スムーズに遊びが成立したかのようにみえたのですが、公彦がピッチャーになって投げる球はカーブがかかかってうてず、バッターボックスに立った昌也は空振りばかりなので、なんとか打たせてあげたいと、「先生がピッチャーになってあげよう」といって、ゆるい直球を投げてあげると、それにうまくあわせた幼児たちの打つ球は、園舎の屋根の上や花畠へとんでいくので、「ホームラン」といって、一塁から二塁へ三塁へ、更にホームへすべりこむのをたのしんでいました。

次の月曜日には、「今日から三振ありにしよう」という昌也の提案から、更に、審判は雅秀、キャッチャーは伸和、ライトは英俊などと役割を交代する中で、「守備の練習」といって、厚は三

畢とホームの間にランナーをはさんで、タッチをして喜ぶなど、遊びは発展していきました。

また、午後保育のある日は、昨年と本年度に市内の小学校のソフト大会で連続優勝をした六年生の選手と混合チームをつくって、一時ごろから試合が始められ、ルールを教えてもらうなど、日ごろは小人数で静かな園内も、一瞬、はなやかな野球場に変容してしまつたかのようにでした。こんな場合、園庭が小学校と共用されているのは、ほんとうに幸いです。

「ほくら六年生になったら、先生は金田のような監督になつてな」という幼児たちのあどけない心をのせて、球は秋晴れの空の下で大きく輪をかいていきます。

このようにして、幼児の発達は常に彼らの要求に支えられています。

幸いにして、野球遊びという目に見えた活動は、教育計画の中で組織はできませんが、幼児教育の中で最も大切にしなければならぬ、人間関係など、幼児の内面の世界に育まれてくるものを、どのように計画してゆけばよいでしょうか。

幼児の自由を大切にすると同時に、教師のきめ細かな意図に引き込むことの大切さを強調される方に出会うと、その論理を具体的な幼児の姿として考えたとき、私としては、生き生きした幼児

の姿が急に遠くへ小さく去っていくように思うのは、私自身が不勉強なのでしょうか。

指導のねらいや指導計画が、先に出て 幼児の活動にはこれがいいと、予想して実践した就職したのころをおもい出すと、何が欠けていたことを今になって悔やんでいます。

幼児の生活の中で、幼児の側に立つて考えると、幼児の生活の中には、偶然の中に多くの「必然」があります。

その幼児の成長にとって必然的な行為、時には、一生のうち一度しか出会わない出来事だつて幼児の生活にはあります。そのことが常にみえる教師になることこそ、保育者ではないかと、おもふこのごろです。

### (三) 近づく国民体育大会と幼児

昭和五十年十月二十六日、伊勢市の県営総合競技場で開催される、第三十回国民体育大会の開会式の集団演技に、二〇〇〇人の市内の五歳児が参加するため、今年の幼児たちで試案が検討されています。その演技の内容は、三〇メートルの綱を五〇〇人の幼児がとんでいくこと、一〇〇人の幼児がつな引きをする、二〇〇人の幼児が野菊のリズム表現をするということで、運動会に少しでもその内容を挿入するように話されると、一人の幼児たちで

は不可能とは思われましたが、例年、色ケントを美しくはったみかん箱を使って、大太鼓で体の動きを表現する活動の中で、せめて六個の箱を二メートル間隔に二列に置き、それをとんでいくということをやってみました。

それが幼児の発達にみあってない活動であっても、二〇〇〇人の一部分をうけもつ一人である幼児に、やはり、教師として経験させてあげたいという要求が先に立って、保育の基本を無視した方向へいくことをよぎなくされてしまうのです。

#### 四、おわりに

その昔、壇の浦の合戦に破れた平氏は、伊勢の大湊に上陸し、落ちのびてきた知盛が、かくれていた覆盆子谷のある沼木の深い山々に、今は炭を焼く人は、村でたったひとりといわれます。初夏の夜子ども眼を楽しませる、この地区で天然記念物である、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルと、紅の色に染められてきた山々にむれ遊ぶ赤とんぼは幼児たちと私に何かを語りかけています。

古くから生きつづけたこの地区の人たちの生活を、この幼児たちも成長して、次の世代に伝えていくのです。その幼児の心の中に教師として何を残していけばよいのでしょうか。

保育という営みの中で、幼児がすぐすこの保育室で、いったい何を経験させてあげればよいのでしょうか。

それはやはり、自分の生きていく目標の中に、自分と他人の関係を、優しいまなざしで眺められる大人になってほしいのです。

就学前教育の内容について、今ほど多くの人たちの間で討議されたことは過去の中になかったのではないのでしょうか。

就学前教育という言葉から受けるイメージにおそれをもちます。就学する前に、何を経験させなければならぬと誰がきめるのでしょうか。幼児から幼児期へ、そして児童期へと成長していく彼らの心の中にうつる、私という教師像に常にきびしい反省をもちたいとおもっています。

やがて訪れるきびしい山の冬にもいとわず、ふたりのおばあさんの乳母車は、風をよけながらあの坂道を上ったり、下ったりしてきてくださることでしょう。

そんな沼木の人たちと心をひとつにして、幼児教育にたずさわる私は、県内で最少人数の田舎教師でありましょう。そんな私に、ぬけるような青い空の色を反映したような二二の瞳は、長い保育者としての生活のページを美しく飾ってくれると信じています。

(伊勢市立沼木幼稚園)

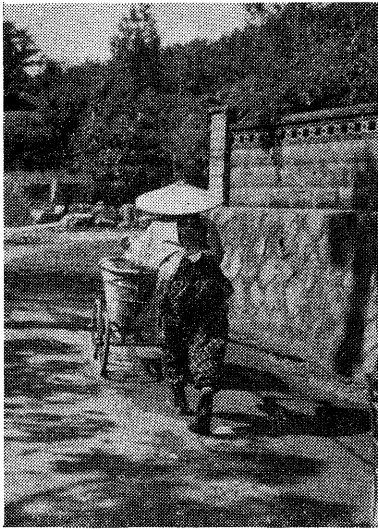
あると思うと、外気のために冷えている客席の窓ガラスに額を押しつけながら見とれていても、心は暖かい。この楽しみは南まわりのヨーロッパ便にとくに多い。

飛行は楽しみばかりではない。今日はいやな日だなど思いつながり乗りこむときもある。そんな飛行は、霧がかかって視程の悪い朝、気流が乱れて機体はつきからつきへと突き落とされる午後、薄気味わるく機体が身ぶるいする夜である。このようなとき、飛行機は逆さにならない限り墜落するものではなく、また飛行機はまずそんなことにならないし、いまのジェット機ならば二〇分ほどがまんすれば一応乱れた気象から抜け出すと、私は自分にいい聞かせる。そうすれば、乗らなければよかった、と後悔することはない。

前に、飛行機は雲の中と上下でゆれるといったが、ジェット機が飛ぶ一万メートル近くでは、雲がなくてもゆれることがあって、これを晴天乱流と呼ぶ。それは大気が水道のホースから吹き出したように、噴流となって流れているところへさしかかったときである。この噴流は地球をはちまきのようにとりまいているが、範囲はせまい。それに入ると、ジャンボ機でも窓から眺めたとき、主翼のはしが大

きくゆれ、そこへつるしてあるエンジンまでゆさぶられて見える。しかし、ジェット機の翼はヤナギに風折れがないという原理で設計されているし、ちゃんとテストしてあるから、ほんとうに折れてしまうことはない。

こんな飛行を続けたあとでは、空港へ着陸して、もうゆれない地面に立つと、ああ、よかったとほっとする。しかし、しばらくたつと、また飛びたくなる。空を雲が動いてゆくさまを仰いで、あそこを飛んだことがあるんだ、いや、もっと高く、その上だつて眺めたことがあると思うと、身体の中にふしぎな勇気がわいてくる。カモメのジョナサンが作り上げた自信である。（日本大学理工学部）



ぼくの自家用車（次ページ参照）